

[別紙2]

審査結果の要旨

氏名 吉田 光爾

思春期青年期にあたる中学生や高校生の時期は、精神障害の好発期にあたり、精神保健上の様々な不適応が高頻度で発生する時期である。よって、精神保健に関する知識の増進をはかり、最終的に専門相談機関へ援助を求めようとする「援助希求行動」の可能性を増進させることを目的とする思春期教育現場における教育プログラムには、早期介入による障害の軽減や予後の改善といった観点から重要な意義がある。しかし、その研究は端緒についたばかりである。

本論文は、その点に注目し、思春期を対象にした精神保健に関する理解の増進、特に援助希求行動の促進を焦点としたプログラムのモデルを提示し、プログラムが本人の援助希求行動に対する態度に与える影響を検証したものである。また、援助希求行動の前提となる諸変数を多軸的・構造的に把握・介入するとともに、それらへの影響を評価し、援助希求行動を増進するためには、どのような介入のあり方があるのかについても検証している。論文提出者は、千葉県C市にある公立の中学校の協力を得、中学1年生5クラス181名を対象とした研究を行っている。うち2クラス(73名)をプログラムの介入群とし、3クラス(108名)を対照群とし、介入となる教育プログラムの実施をはさんで2時点において、無記名の自記式調査票による調査を行い、効果を評価している。

介入の影響が認められた変数は、「Ⅰ.メンタルヘルスへの理解」については、「精神障害の知識度」、「精神障害の罹患可能性の意識」であった。また「Ⅱ.専門相談機関への援助希求行動に対する認識」について、「専門相談機関に関する知識度」では影響が認められたが、「こころの相談に関するイメージ」の総合得点には影響が認められなかった。しかし、同尺度の下位因子である「(相談の)メリットの意識因子」因子得点には影響が認められた。なお、同尺度下位因子「恥の意識因子」「デメリットの意識因子」因子得点には影響が認められなかった。最終的な目的変数である「Ⅲ.援助希求行動に対する態度」については、「専門相談機関への相談意向態度」、「ASPH」の両尺度について、介入の影響が認められた。

また、男子と女子に対する影響の差を比較すると、女子のみに「精神障害の罹患可能性の意識」、「こころの相談に関するイメージ」に介入の効果が認められた。また「精神障害の知識度」、「精神障害の罹患可能性の意識」、「専門相談機関に関する知識度」、「こころの相談に関するイメージ」、「イメージ尺度下位因子：メリットの意識因子」因子得点、「専門相談機関への相談意向態度」、「ASPH」において、女子が男子より大きなエフェクトサイズを示しており、本プログラムは特に女子に対して効果が高いことが示された。

以上から、最終的な目的変数である援助希求行動に対する態度の各指標に改善が見られ、本プログラムが援助希求行動を増進する効果をもつ可能性が示唆されていた。また、援助

希求行動の前提となる、精神障害や障害の罹患に関する意識、専門相談機関に関する知識などの諸変数に有意な影響を及ぼしていた。これらから、本プログラムが、総合的に援助希求行動を増進するためのプログラムのモデルとなりうることが示唆されていた。

以上から、本論文は、思春期青年期における精神保健に関する知識・態度を総合的に増進するプログラムの効果を実証的に評価したという観点で独創性がある。またそのプログラムの効果は有用であると示唆されていることから、実際の思春期の教育現場で使用しうるものを開発したという点で実践的にも有用性があり、学位の授与に値するものと考えられる。